

＜瀬織津姫と菊理姫－シリウス系と太陽系＞

＜星の信仰－太陽信仰の本質＞や＜空海＞では、太陽信仰に隠されたシリウス信仰があり、それは宇宙根源の天御中主神信仰でもあって、謎を解く重要な鍵として瀬織津姫と菊理姫が登場し、両神はほぼ同義であると見なした。

しかしながら、瀬織津姫は神道の大祓詞に祓の一柱の神として登場するものの、記紀には登場しない謎多き女神であり、菊理姫は日本書紀の一書（あるふみ、第十）に一度だけ登場するのみで（後述）、これまた謎多き女神だが、このように扱いが異なることは、何か理由があるはずである。

そこで、本編に於いては、この両神の違いを検討すると同時に、両神が太陽とシリウスを繋ぐ鍵であることから、スミルノフ物理学的考察を交えながら、その真意を考察する。

(1) 振り返り

① 星の信仰

- ・太陽系はシリウス系の一部である。

- ・太陽＝天照大神は影のできる光で、影のできない真の太陽は宇宙創造のエネルギー＝起源意識に通じるシリウス＝豊受大神＝国常立神＝天御中主神であり、太陽とシリウスは「合わせ鏡」の関係にある。

- ・太陽のシンボルは六芒星、シリウスのシンボルは（逆さ）五芒星である。

- ・アヌンナキの星ニビルはシリウスと太陽を結ぶ橋渡し役で、ニビルはシリウスをも暗示する。

- ・シリウスには、カバラ的にエンキをメインとしてイナンナが重ねられており、それが瀬織津姫であり、菊理姫であり、弁天様＝イチキシマヒメであり、豊受大神である。

- ・イナンナよりもエンキの方がシリウスに関わりが深く、エンキをメインとしてイナンナを重ねることにより、シリウスこそが本来の太陽であり、太陽がシリウスの影響を受けていることを暗示している。そして、エンキはツキヨミなどとして隠されている。

- ・瀬織津姫の水による祓い＝洗礼の性質は、エンキを「合わせ鏡」で女神とし

たインダスの洗礼の女神ガンガーと同じである。そして、ガンガーはイナンナを「合わせ鏡」で男神としたシヴァ神の髪の中にいる。

- ・縄文海人はエンキを最高神とし、弥生海人はイナンナを最高神とした。

- ・瀬織津姫は真相が知れてはまずい天照大神よりも古い縄文系の神で、天照大神とは表裏一体の関係にあり、本質は瀬織津姫＝シリウスで、それを故あって隠して天照大神＝太陽を表とした。

②空海

- ・水神＝エンキと習合された太陽女神・天照大神＝イナンナはシリウスの暗示で、瀬織津姫である。

③スミルノフ物理学

- ・物質宇宙を生み出した大元の存在＝起源意識＝創造主＝天御中主神は、無限的な広がりを持つ巨大な光のエネルギーであり、そこから黄金比フラクタル分割により星や物質、生命体が誕生した。

- ・エーテル繊維は負の性質を有する S 極磁気系と、正の性質を有する N 極電気系で構成され、それぞれ物質の根源である S 極磁気単極子、N 極磁気単極子を形成し、エーテル繊維は宇宙に網の目のように存在する。

- ・全宇宙は S 極系エーテル繊維が対数螺旋構造を成して繋がっており、万有引力の基となっている。そして、すべての星の中核には S 極磁気単極子が存在し、宇宙を貫く S 極系エーテル繊維に繋がっており、対数螺旋を成す S 極系エーテル繊維がベースとなって物質が生成し、生命体が発生した。この S 極系エーテル繊維のエーテルエネルギーこそ、龍のエネルギーである。これを暗示しているのが、籠神社と眞名井神社である。

(2)瀬織津姫

一般的には水神や祓神、瀧神、川神の性質を有し、祓戸四神の一柱で祓い浄めの女神で、大祓の祝詞にも登場し、穢れを早川の瀬で浄めるとされるが、記紀には登場しない。大祓の祝詞に登場する祓戸四神は、以下である。(永田文昌堂編集部編、永田文昌堂、『増補 神道大祓全集』、重版、2009)

- ・速川の瀬に坐（ま）す瀬織津比賣＝瀬織津姫。

- ・荒潮の潮の八百道（やほち）の八潮道（やしほち）の潮の八百會（やほあひ）に坐す速開都比賣（ハヤアキツヒメ）。
- ・気吹戸（いぶきど）に坐す気吹戸主（イブキドヌシ）。
- ・根國底國（ねのくにそこのくに）に坐す速佐須良比賣（ハヤサスラヒメ）。

この部分の祝詞の意味は、およそ次のようになる。

“溪流となっている急流に居る瀬織津姫が穢れを速川の瀬から大海原に持ち出し、潮の流れの激しい所に居る速開都比賣が飲み込み、根國底國に繋がる生命の息吹が発生する息吹戸に居る気吹戸主が激しく吹き放ってしまい、根國底國に居る速佐須良比賣が遙か彼方へ持ち去り、穢れは失われてしまう。”

瀬織津姫の性質的には、水神としては龍神（オカミノカミ）や閻罔象神（ミヅハノメノカミ）、吉祥天や弁財天が該当する。

倭姫命世記等に於いては、内宮別宮・荒祭宮の祭神（天照大神の荒御魂）の別名が瀬織津姫であると記述され、古くから皇室の崇敬が篤かった廣田神社（兵庫県西宮市）では天照大神荒御魂を主祭神としているものの、戦前の由緒書きには、瀬織津姫を主祭神とすることが明確に記されていた。（Wikipedia）

つまり、神道的には、天照大神荒御魂が瀬織津姫である。

①水神系、祓神としての性質

水神の根源は、水瓶をシンボルとする海神で地球の主エンキである。大祓詞には“瀬織津姫は溪流となっている急流にいて、祓い清められた全ての罪・穢れを大海原に持ち去る”とあるので、川にいる水神だが、海神としての性質も持ち合わせるので、エンキの水神・海神としての性質が投影されている。

エンキはイナンナの冥界下りの際、瀕死の状態になったイナンナに使者を遣わし、「生命の水」を与えて“復活”させたが（＜神々の真相 1＞、以下、シュメールやアヌンナキに関わる部分も）、“復活”は死という最大の穢れからの祓でもある。そして、大祓の祝詞では、最初に瀬織津姫が作用するから、瀬織津姫は祓の先導役でもある

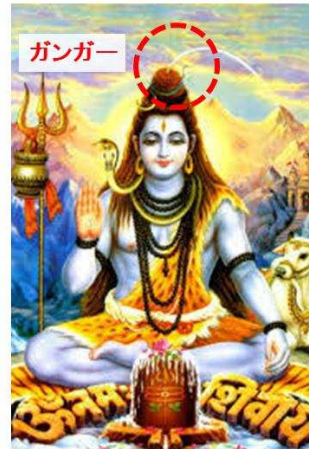
イナンナはインダスの創造神で、シヴァ神でもある。（＜神々の真相 3＞。以下、インダスに関わる部分も。）シヴァの髪には洗礼の女神でガンジス川の女神ガンガーがいるが、これはまさしくこの冥界下りの場面の再現で、「合わせ鏡」でエンキを女神ガンガー、イナンナを男神シヴァとしたものである。そして、エンキとイナンナ重なりは、シリウスを暗示する。（＜星の信仰＞）

エンキ



人類を創成した宇宙人(徳間書店)

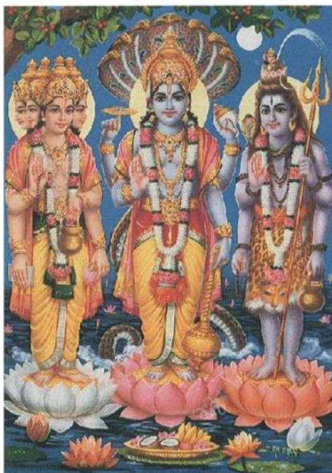
シヴァとガンガー



<https://search.yahoo.co.jp/image/search?rkf=2&ei=UTF-8&gdr=1&p=%E3%82%B7%E3%83%B4%E3%82%A1+%E3%82%AC%E3%83%B3%E3%82%AC%E3%83%BC>

②吉祥天としての性質

ブラフマー ヴィシュヌ シヴァ



学研NSMブックスエソテリカ宗教書シリーズ
「ヒンドゥー教の本」

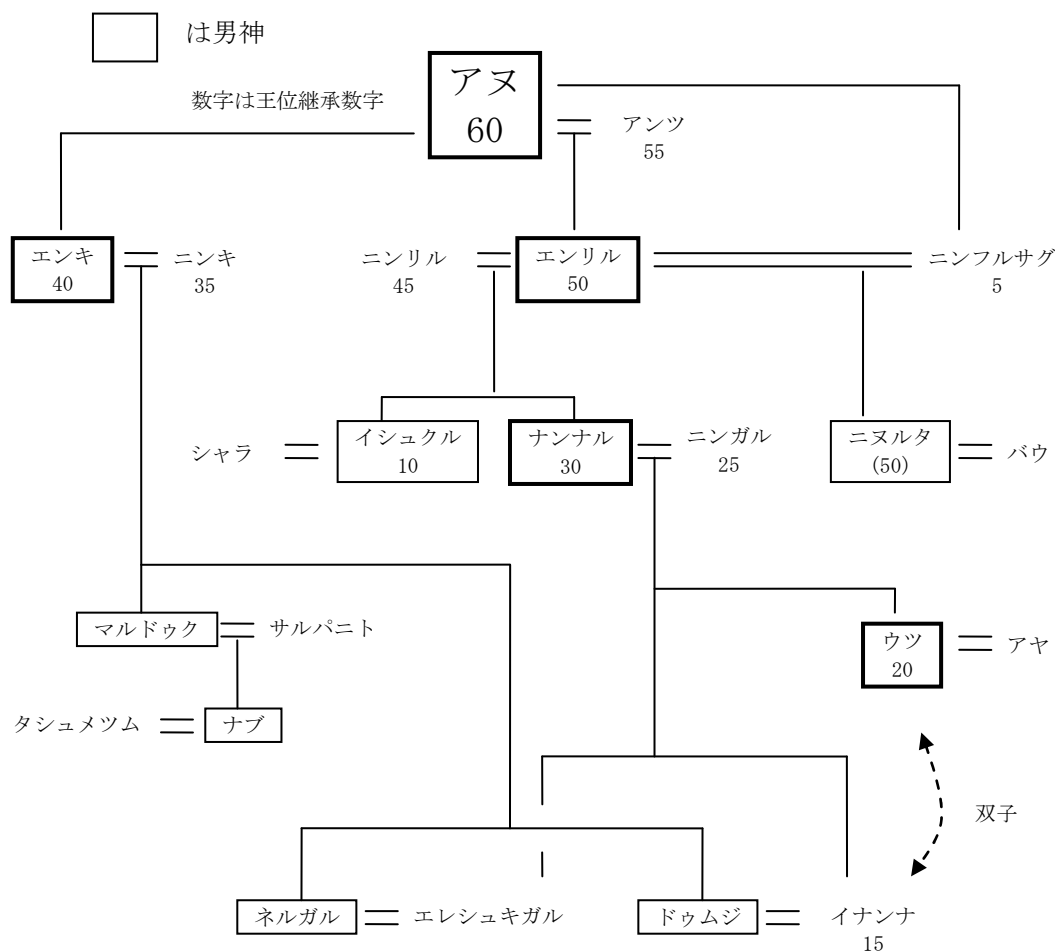
インダスの三神はブラフマー（創造）、ヴィシュヌ（維持）、シヴァ（破壊）であり、創造神のブラフマーは最高神アヌに該当するが、インダスの実質の創造神はイナンナだから、イナンナも該当する。

ヴィシュヌにはイエスの救世主の性質があり、イエスの原型の 1 つ、とりわけ“復活”の概念の元はイナンナである。（＜神々の真相 5＞）

また、シヴァにはイナンナの奔放な性や、舞の神としての性質、戦いの神としての性質が投影され、これもまたイナンナである。

従って、インダス三神は基本的にイナンナの分身である。

吉祥天はヴィシュヌの妻ラクシュミーだが、ヴィシュヌがイエスの性質ならば、ヴィシュヌはイナンナの婚約者ドゥムジでもあり、この場合、ラクシュミーがイナンナとなる。何故なら、ドゥムジはマルドゥクの策略によって死に、イナンナはドゥムジの亡骸に赤い経帷子を着せ、横穴の洞窟に埋葬して“復活”を願ったので、ドゥムジもまた、イエスの原型だからである。（＜神々の真相 5＞）カバラはある側面から見た性質なので、見方に依り、一柱の神の原型が女神になったり男神になったりする。イエスの典型的なシンボル“復活”には、自身が“復活”したイナンナと、“復活”を願望されたドゥムジの両方の面がある。穏やかな和御魂、荒々しい荒御魂も同じような見方である。



吉祥天は邪気を祓う北方の守護神・毘沙門天の妃または妹とされるが、京都の鞍馬寺では毘沙門天が祀られる。毘沙門天は北方が領地だった戦いの神で雷神イシュクルが原型で（イシュクルはゼウスの原型でもある）、戦う女神イナンナは叔父のイシュクルと兄妹のように仲が良かったから、吉祥天はイナンナである。

また、吉祥天は未来には成仏して吉祥摩尼宝生如来（キチジョウマニホウシヨウニョライ）になるとされるが、マニとは、チンター（思考）マニ（珠＝タマ）＝サンスクリット語で如意宝珠（靈験を表すとされる宝の珠）のことであり、一言で言えば、エンキが持っていた“知識のメ”であり、イナンナがエンキを色気で誘惑して手に入れた。

このエンキの好色さに着目すると、チンターマニの他の面が見えてくる。チンターマニはインドネシア語ではキンタマーニとなるので、下ネタではあるが、

ご容赦を。では、ここでエンキについて振り返る。

・好色なエンキ（＜神々の真相 1＞、＜宇宙維新 黄金の夜明け＞）

大気シールドが危機となったニビルを救うには、金（きん）コロイドや金プラズマが必要だったが、ニビルには金はわずかししか存在しなかった。そこで、地球の金に目が付けられ、採掘のために降臨したアヌンナキ。その主導的立場だったのが、ニビルの王子で科学者、知恵者であるエンキである。

金採掘は重労働だったので、ニビル人＝アヌンナキに替わる労働者として、エンキは猿人・原人から人類を創成した。手伝った科学者は、エンキの息子ニンギシュジッタ、異母妹のニンマー（ニンフルサグ）である。アフリカに居た直立猿人の遺伝子を操作し、アヌンナキの DNA を組み込んで人類を誕生させたが、当初は生殖能力が無く、それを解決して誕生したのが、アダムウ（地球の粘土のような者）とティアマト（生命の母）である。

しかし、仲間同士の交配により、人類は野生へと退化していった。エンキは水浴びして戯れる 2 人の野生的で美しい女性を見つけ、彼女らに魅了され、彼女たちと直接交わった。すると、しばらくして 1 人が夜明けに男児を、もう 1 人が同じ日の夕暮れに女児を出産した。男の子はアダパ（捨て子）、女の子はティティ（命を持つ者）と名付けられた。このように、人類にはエンキの遺伝子が組み込まれており、エンキは人類の父である。

ニビルでも女癖が悪かったエンキだが、ニビルの王アヌはアダパとティティの秘密を知り、地球でもエンキの女癖は治っていないことを知った。エンキはニンマーをととても愛し、何度も妊娠させたが、後継者たる男児は生まれなかった。

アダパとティティが交わって産んだ双子の兄弟は、兄がカ・イン（田畑で食べ物を育てる彼、聖書名カイン）、弟はアバエル（灌漑された牧草地の彼、聖書名アベル）である。アヌンナキが彼らに農耕と牧畜を教え、エンキとエンリルによる初物の祝福に於いて、カ・インはアバエルに嫉妬し、殴り殺した。そのため、ヒゲをはえなくして中南米に追放された。彼らは、環太平洋文明の礎となった。また、アダパとティティの次の息子サティ（聖書名セツ）からも、人類は増殖した。

アダパの死後、ニビルが接近し、異常気象となった。勝手に人類を創り出したエンキに対して、エンキの弟で地球の総督エンリルは不快に思っていたので、これを機に、人類を滅ぼそうとした。しかし、エンキは機転を利かし、地球の生命種を救おうとした。

サティの血統ル・マク（聖書名レメク）の妻バタナシュは際立って美しく、エンキは言葉巧みに彼女を誘い出し、自分のものとした。そして、男児が生まれ

た。肌は雪のように白く、髪は羊毛の色で、目は空のようで、その目はキラキラと利発そうに輝き、これまでの地球人種とは異なる様相だった。男児はジウストラ（長く明るい人生の日々の彼、聖書名ノア）と名付けられ、白人の祖となった。年数が地球で数えられてから 110 番目のシャルのことで、緊急通報番号の元となった。1 シャルは、ニビルの公転周期 3,600 年である。

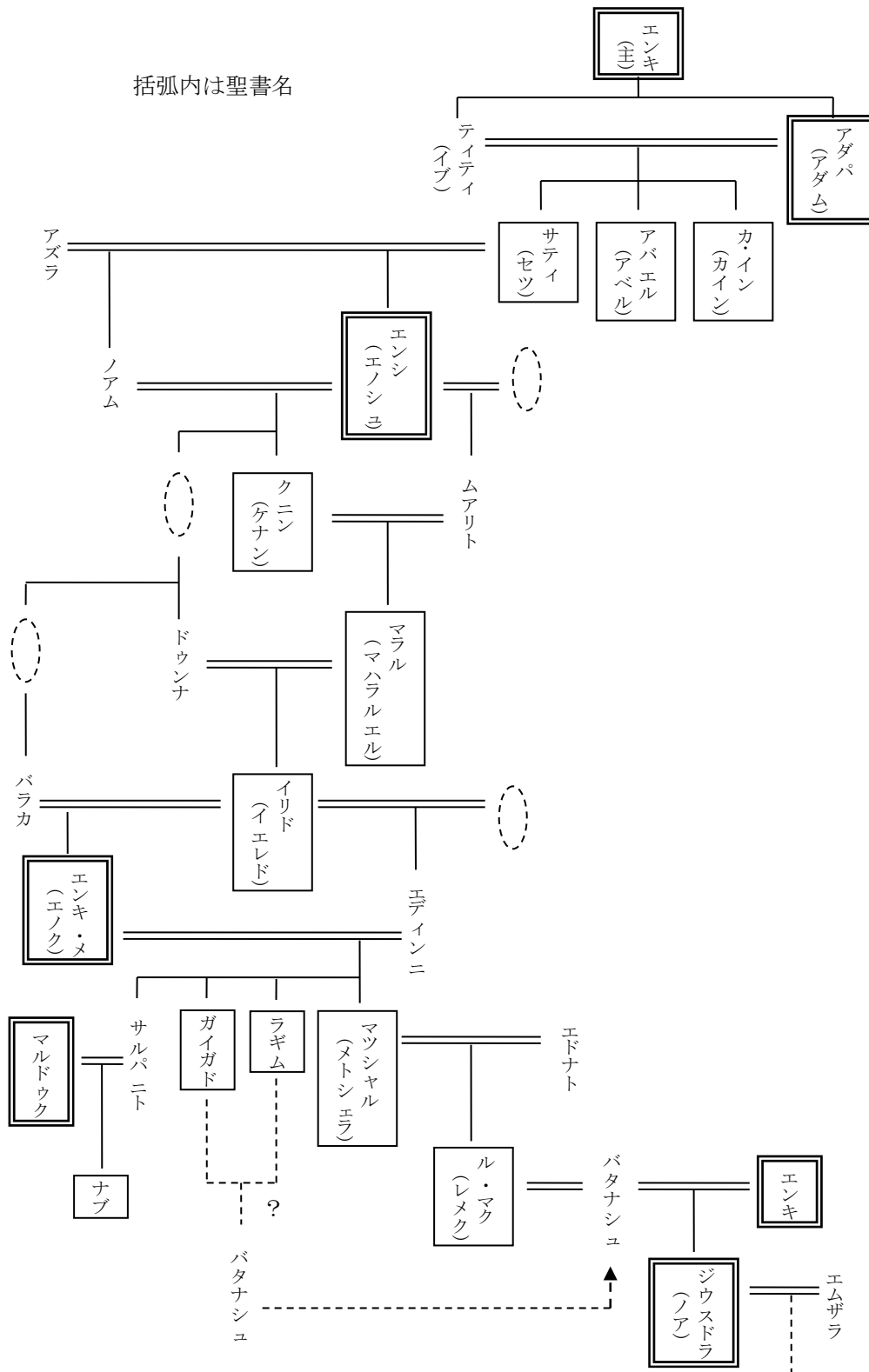
エンキはジウストラが寝ている葦の小屋へこっそり行き、エンリルとの誓いを破ることなく、葦の壁に向かって語りかけた。設計図に従って 7 日間で大きな船を造り、親類を集め、食糧と飲み水を山積みにし、家畜も連れて行くことを。ジウストラは見えないエンキの言葉に従い、エンキは息子のネルガルを船頭として派遣した。その後、120 番目のシャルに大洪水となったが、ジウストラは救われた。13,000 年ほど前のことである。

この後、人類に文明を花開かせることが決定されたが、エンキの長子マルドゥクのエゴにより、人類は後に核戦争に巻き込まれた。しかし、それをも乗り越えて、再度、人類は増殖したが、またもやニビルの接近となった。

その際、エンキはジウストラの時のように振る舞った。既に存在したフリーメイソンでもある大工ヨセフ、その妻マリアに目を付けた。そして、神に仕える高位の神官として、マリアと交わった。その後、今度はお告げの大天使ガブリエルとして、神の子を身籠ったことを壁に隠れてマリアに告げた。

その子イエスは、マルドゥクのしでかした人類への罪滅ぼし、神々が核戦争を引き起こした罪滅ぼし、それらがきっかけで墮落し始めた人類のために、神の子羊として犠牲となる運命が待っていた。そして、ニビル最接近時、運命の十字架に掛けられ、大地は揺れ、天地は闇に覆われた。仮死状態になったものの、イエスはニビルの医療で蘇った。そして、エンキを暗示する数字の 40 日後に、エンキが遣わした“空の船”に吸い込まれていった。

括弧内は聖書名



このように、黄金を採取するために地球に降臨した最初のニビルの王子で好色な知恵者エンキによって人類は誕生し、好色なエンキによってジウストラが誕生して人類は大洪水の危機から救われ、好色なエンキによってイエスが誕生して人類の贖罪は贖われた。すなわち、黄金に関わる精力絶倫な知恵者エンキのタマものであり、精力の根源は睾丸である。故に、その絶倫の源を“金の珠”と言い、知恵者エンキに因んでキンタマーニ=チンター（思考）マニ（珠）となる。

如意宝珠例



<https://search.yahoo.co.jp/image/search?rkf=2&ei=UTF-8&p=%E5%A6%82%E6%84%8F%E5%AE%9D%E7%8F%A0>

また、エンキはチンにも関わる。それは、カナンの詩に書かれている。エンキはかつて、カナンの最高神エルでもあった。アブアダム（人の父）がエルの肩書であり、“情け深い、憐み深い”があだ名だった。カナンの詩「情け深い神の誕生」にはこうある。（＜日本の真相 7＞）

“エルが海岸にいと、2人の女性が彼のペニスの大きさにうっとりしてしまった。そして、遊んでいた鳥が浜の上で日光浴をしている間に、エルはその2人の女性と交わり、二柱の神シャハル（夜明け）とシャレム（夕暮れ、または完成）が生まれた。”

エルの一物は2人を同時妊娠させるほど、立派なものだったようであるが、この詩の元は、前記の話であることは明白である。

カナンと言えば、ヘブライの民が荒野を40年さまよった挙句、導かれた地でもある。40はエンキの王位継承数字である。また、カナン=フェニキアの最高神は後にイナンナとなるが、イナンナも奔放な性愛の女神であり、エンキとイナンナの重なりで、シリウスとなる。

以上、吉祥天はエンキとイナンナの重なりであり、女神としての性質はイナンナが共通している。

③弁財天としての性質

弁財天は元々インダスの最高神ブラフマーの妃サラスヴァティーのことで、リグ・ヴェーダの中では最高の母、女神の中の女神と賞される川の女神である。

サラスヴァティーは、ブラフマーが自ら創り出した娘なので、ブラフマーをニビルの最高神アヌと見なせば、サラスヴァティーはその娘ニンフルサグとなる。しかし、実際にニンフルサグと交わったのはエンキとエンリルで、エンキは地球の主、エンリルは地球の総督であり、地球の最高神としては地球の主の方が相応しいから、ブラフマーは地球の主エンキでもある。

ニンフルサグは、異母兄のエンキと共に遺伝子操作を行って人類を創成した女科学者・医療者で、後に“マミー（ママの語源）”と呼ばれることになった人類の母とも言える存在なので、“最高の母”である。また、サラスヴァティーは学問と知恵、芸術などを司る女神となっているので、ニンフルサグが隠れ、知恵と芸術の女神イナンナの性質も含まれる。

神仏習合では、天武天皇は内宮に祀られる女神、天照坐皇大御神荒御魂瀬織津姫（＝天照大神の荒御魂である瀬織津姫）を役行者（エンノギョウジャ）と共に、日輪弁財天として天河大弁財天社に祀ったとされる。日輪が太陽で、太陽が天照大神ならば、その荒御魂である瀬織津姫はもう 1 つの太陽ということで、すなわち、シリウスである。

また、弁財天は宗像三神の中のイチキシマヒメと習合した。イチキシマヒメは、アマテラスとスサノオが（籠神社に関わる）天真名井で行った誓約（うけい）の際に、スサノオの剣から生まれたとされる五男三女神の一柱である。三女神をまとめて宗像三神と言う。一般的には福岡の宗像大社が総本山とされるが、大分の宇佐神宮では土着の古い神として祀られており、実は福岡の宗像よりも時代的に古い縄文以来の神で、縄文三王家を暗示する。（＜縄文海人と弥生海人＞）

籠神社の秘伝では、祖神の彦火明命の妻がイチキシマヒメで、その亦名が瀬織津姫である。これは、海部氏の大王が縄文王家の姫を娶って、和平を結んだことの暗示でもある。

また、彦火明命の荒御魂は瀬織津姫とも言われており、彦火明命の正式名が天照国照彦火明櫛玉饒速日命（アマテルクニテル・ヒコホアカリ・クシタマ・ニギハヤヒノミコト）であって、天照大神の性質があるならば、その荒御魂た

る瀬織津姫はシリウスである。

根源神・豊受大神を祀るとされる籠神社・眞名井神社の別名が、シリウスの和名“与謝星”に因む与謝宮とされているのは、暗示的である。

更に、弁財天は宇賀神と習合した。宇賀神は宇迦之御魂神（ウカノミタマ）に由来し、宇迦之御魂神＝豊受大神＝イナナである。宇賀神は以下のように翁と女神があるが、女神ならばイナナである。翁ならば、籠神社でスサノオ（＝シヴァ、イナナ）と同体とされる塩土老翁（シオツチノオジ）であり、ヒコホホデミや神武に情報を授けた海に関わる神だから、知恵の神で海神のエンキである。すなわち、イナナとエンキを併せてシリウスの暗示で、共に蛇神である。（エンキはアスクレピオスの杖をシンボルとする“良い蛇”の原型。）



まとめると、瀬織津姫は縄文の最高神的な水神、祓の神で、瀬織津姫＝天照大神荒御魂＝吉祥天＝弁財天で、籠神社の極秘伝、“天照大神の荒御魂は豊受大神の和御魂、豊受大神の荒御魂は天照大神の和御魂”“豊受大神 又名 天御中主神 又名 天照大神”ということからすれば、根源神である豊受大神＝天御中主神とも言え、太陽神的な天照大神＝日＝陽に対して、水＝陰となっている。そして、エンキ、イナナ、ドゥムジ、ニンフルサグが重なり、エンキとイナナの重なりでシリウスを暗示する。

(3) 菊理姫

白山比咩神社で祀られる女神だが、日本書紀の一書（第十）に一度だけ登場するだけで、正体不明の神である。

亡くなったイザナミに逢いに黄泉国を訪問（冥界下り）したイザナギは、イザナミの変わり果てた姿を見て、恐ろしくなって逃げ出そうとしたが、黄泉比良坂（よもつひらさか）で追いつかれ、口論となった。そこに菊理姫が現れて

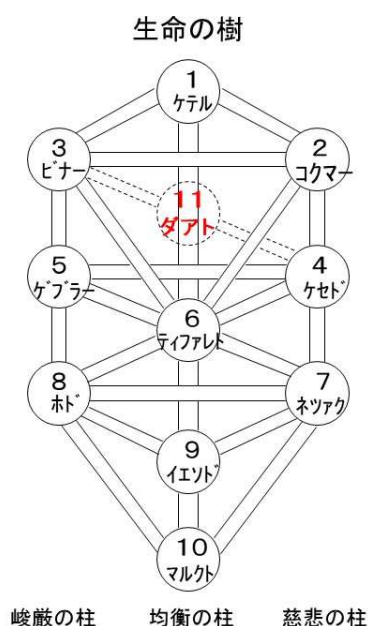
何か言うと事は収まり、イザナギは地上に還った。菊理姫が何を言ったのかは不明であり、出自もまた、不明である。(Wikipedia)

白山比咩神社の伝承に依れば、泰澄の前に九頭竜神として現れ、十一面観音に変化したとされる。

世界中の冥界下りの原型は、イナンナの冥界下りである。マルドゥクの策略によって亡くなった婚約者ドゥムジの亡骸を取り戻すため、亡骸が安置されている“下の方の世界（南アフリカ）”を訪れた話である。

そこは、イナンナの姉エレシュキガルが治めていたが、疑われ、木に掛けられて瀕死の状態となったものの、エンキが遣わした使者の持つて来た「生命の水」で蘇り、無事、ドゥムジの亡骸を運び出した。

つまり、イナンナが掛けられた木は「生命の樹」で、隠されたダウトも含めた形が十一面観音として具現化されている。ダウトは悟りの知恵で、十一面観音では後ろにある笑った顔であり、イナンナは知恵の女神である。



十一面観音



滋賀県高月町 渡岸寺 十一面観音

十一面観音の裏にある笑った顔

<https://ameblo.jp/motoharu567/entry-12229728187.html>

また、八岐大蛇の話の原型は、イナンナが悪龍を退治するヒッタイトのイルルヤンカシュ退治(*)だが、八岐とは“8つの分かれ目”という解釈が可能で、ならば、八岐大蛇の頭は実は9つで九頭竜となるから、九頭竜神はイナンナの関わりを暗示する。更に、イナンナのシンボルは中東でしばしば見られるロゼッタで、十六花卉八重表菊紋の大元である。

＊イルルヤンカシュ退治 (Wikipedia)

天候神で嵐神プルリヤシュと竜神イルルヤンカシュが争った時、イルルヤンカシュの強大な力の前に、天候神である嵐神プルリヤシュは敗れ去った。そこで、風と大気の神である女神イナラシュに助力を求めた。女神は盛大な酒宴を開き、イルルヤンカシュを招き、イルルヤンカシュを泥酔状態にした。

女神は人間の中から選ばれたフパシヤシュという男に、泥酔して動けなくなったイルルヤンカシュを縛ることを依頼した。

フパシヤシュは女神と一夜を共にすることを条件に、イルルヤンカシュを縛り上げた。その後、嵐神プルリヤシュにより、イルルヤンカシュは殺された。

女神イナラシュとは、名前からしてもイナンナのことである。ヒッタイトは天候を司る神＝イシュクルの領地で、プルリヤシュはイシュクルだが、ヒッタイトには太陽女神という概念があった。そして、イシュクルは太陽女神をその配偶神としたとされる。太陽女神とはイナンナのことで、イシュクルはイナンナの叔父（エンリルの末息子）だが、イナンナとは兄妹のように仲が良かったので、そのように見なされたのであろう。

イナラシュには、イナンナの祖父であるバアル＝エンリルの“風と大気”という性質が付与されている。

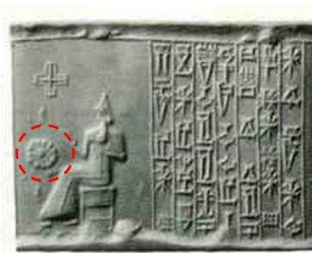
「女神と一夜を共にする」ことは、聖婚を始めたイナンナの性質である。

この地域から、マルドゥクが自らの正統性を流布し始め、故に、竜神イルルヤンカシュはマルドゥクである。ただし、邪悪な竜としてである。

つまり、菊理姫の原型はロゼッタをシンボルとするイナンナであり、海部氏の最高神は豊受大神＝イナンナだから、菊理姫＝豊受大神＝国常立神である。ここには、イナンナ、ドゥムジ、エンキが重なり、ニンフルサグは無い。

ロゼッタの例-1

シュメールの粘土板



バビロンのイシュタル門

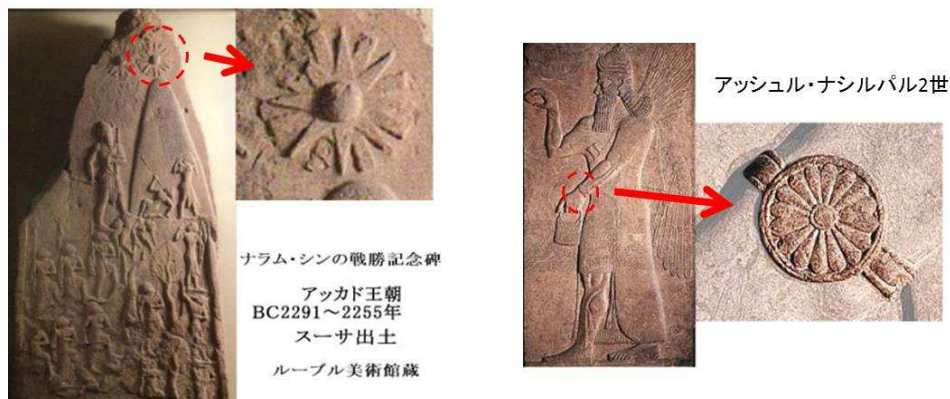


ツタンカーメン王の墓からの出土品



<http://wave.ap.teacup.com/renaissancejapan/242.html>

ロゼッタの例-2



新潮古代美術館1、オリエントの曙光、1980.9.15

偽書ともされ、「あわ歌」が登場する、縄文からの伝承とされる秀真伝（ホツマツタエ）では、まったく別の伝承となっている。菊理姫神はククリ姫とされ、天照大神の伯母であり、養育係となっている。

トヨケ神（＝豊受大神）の娘イザナミと、優秀な若者であったイザナギが結婚し、太陽の神霊の子どもを授かりたいと願掛けすると、イザナミは卵を産み、そこから男子が生まれた。これが、アマテル神（天照大神）である。アマテル神の産湯を用意したのが、イザナギの兄弟であったシラヤマ姫である。彼女がその子に直接名を聞くことによって、その子を“ウヒルキ”と名付けた。ウは「大いなる」、ヒは「日輪」、ルは「靈魂」、キは「熱」を表し、まさしく太陽神だった。名を「聞き切る」ことから「キクキリ姫」となり、転じて「ククリ姫」となったという。

アマテル誕生の時には御衣を織って奉り、機織りの神としての側面を持つ。
（池田満著、展望社、『『ホツマツタエ』を読み解く』、『ホツマ縄文日本のたから』）

ホツマツタエではまったく異なる伝承だが、重要なのは、菊理姫はアマテルに先駆ける神であること、アマテルの産湯を用意したり名付け親のようになっていること、機織りとしての側面があることである。天照大神に先駆け、天照大神の名付け親とも言えるのは、太陽信仰よりも古くからある別の太陽信仰を暗示する。すなわち、シリウス信仰である。

また、機織りは七夕の織姫に反映されるが、織姫の原型はイナンナ、牽牛はドゥムジだから（＜神々の真相 2＞）、機織りの側面はイナンナである。

ここまでをまとめると、瀬織津姫と菊理姫に重ねられているシュメールの

神々は、次のようになる。

- ・瀬織津姫：エンキ、イナンナ、ドゥムジ、ニンフルサグ。
- ・菊理姫：イナンナ、ドゥムジ、エンキ。

瀬織津姫にはニンフルサグも重なる。彼女はエンキと共に人類創成に携わり、人類の母とも言える存在である。彼女はエンキ、エンリルの異母妹であり、イナンナは彼らの孫の世代に当たるから、ニンフルサグはイナンナに先駆ける母神の原型である。

すなわち、瀬織津姫は菊理姫と重なる部分が多いが、菊理姫よりも古い部分がある。これを裏付けるかの如く、白山中居神社の関係者に依れば、祭神とされているのは菊理姫だが、**菊理姫とされる以前の神名は瀬織津姫だった**、という。つまり、菊理姫は訳あって創作された神と言える。だから、謎多き正体不明の神である。

菊理姫のメインは、女神の性質と菊が示すが如く、イナンナである。イナンナをメインにして、ニンフルサグを隠す。そして、イナンナは海部氏の最高神である。となると、海部氏の弥生の神に先立つ縄文の神を隠す、という構造が見えてくる。

(4) 白山本宮のある鶴来（つるぎ）

鶴来の氏神は、白山本宮ではなく、町の中心部に鎮座する劔宮（金劔宮）であり、鶴来の地名もこれに由来するとされる。ならば、九頭竜＝八岐大蛇退治の劔＝草薙神劔である。

ここの秋の例大祭は、ほうらい祭りとして知られる。ほうらい＝蓬萊は、古代支那に於いて、東の海にあり、仙人が住むと言われていた仙境だが、熱田の地も蓬萊と呼ばれ、草薙神劔を祀るのは熱田神宮である。

劔宮の祭神は瓊々杵尊、大國主神、大山咋命、日本武命、事代主神、猿田彦神で、草薙神劔縁の日本武が祀られるが、熱田神宮でも熱田大神として日本武が祀られる。（名目上は草薙神劔に宿る天照大神とされるが、信長などからは日本武と見なされてきた。天照大神の分身とされるのは、通常、鏡である。）

猿田彦は環太平洋縄文文明圏を築いた（影の）最高神で太陽神＝ケツアルコアトル＝ニンギシュジツダであり、日本武は海部氏の血統、大國主と事代主は出雲系で海部氏と共に物部氏、瓊々杵と大山咋は秦氏系ということで、縄文－弥生－大和朝廷すべてが重なっており、縄文を隠すような形となっている。

また、劔宮の境内に湧く泉は天乃真名井と言われ、天平年間（729 年～749 年）から伝わる古池とされるが、この大元は言うまでも無く、籠神社の眞名井である。ここから湧き出る水は明星水とも言われるが、明星は金星のことでイナンナのシンボルであり、イナンナは豊受大神の原型だが、それに関わる水ならば「生命の水」である。

つまり、イナンナの九頭竜＝草薙神劔由来から、尾張氏＝海部氏との関わりが伺えるが、ここは本宮への道中にある宮なので、ここが本宮を護る＝隠す役割とも言え、それが劔であり、戦いの女神イナンナである。本宮を護る劔、この構造は尾張氏の熱田神宮でも見られる。

熱田神宮の正門は南側で、別宮の前を通過して本宮へ、という構造である。別宮にある八劔宮では、御神宝として俱利伽羅劔（くりからけん）が祀られている。俱利伽羅劔は、不動明王が右手に持つ劔だが、エネルギー体としての草薙神劔の象徴で、それはすなわち、邪を破壊するシリウスのエネルギーである。（＜星の信仰＞）邪の破壊は祓であり、水による祓と同義である。（水も劔も、陰陽言えば陰である。）



<https://www.atsutajingu.or.jp/jingu/about/keidai/>

不動明王



<http://www.manpukuin.or.jp/fudomyoo.html>

さて、本宮を護るとは言うものの、かつての本宮は白山山頂の奥宮だった。現在の本宮には奥宮遥拝所があるが、そこには御前峰（ごぜんがみね）、大汝峰（おおなんじみね）、別山の白山三山の形をした大岩が祀られており、この三山を遥拝する形となっている。つまり、白山三山として本宮なのであり、3本柱で1つの神界を構成する「生命の樹」で、御前峰では菊理姫、大汝峰では大己貴神、別山では大山祇神が祀られている。

- ・菊理姫：イナナをメインとし、エンキ、ドゥムジも。
- ・大己貴神：スサノオ＝イナナとエンキ。
- ・大山祇神：エンキ。

そして、白山中居神社の関係者に依れば、祭神とされているのは菊理姫だが、菊理姫とされる以前の神名は瀬織津姫だった、という。

- ・瀬織津姫：エンキ、イナナ、ドゥムジ、ニンフルサグ。

ニンフルサグは人類の母であり、そこに、大地母神としてのイナナも重なる。イナナとエンキの重なりはシリウスの暗示だが、そこに更に母神的なニンフルサグが重なるわけである。

創造のエネルギー＝起源意識は、物質宇宙を生み出した母神的性質である。従って、ニンフルサグが重なることにより、シリウスでもあるが、母なる宇宙をも暗示する。すなわち、神名で言えば天御中主神となる。

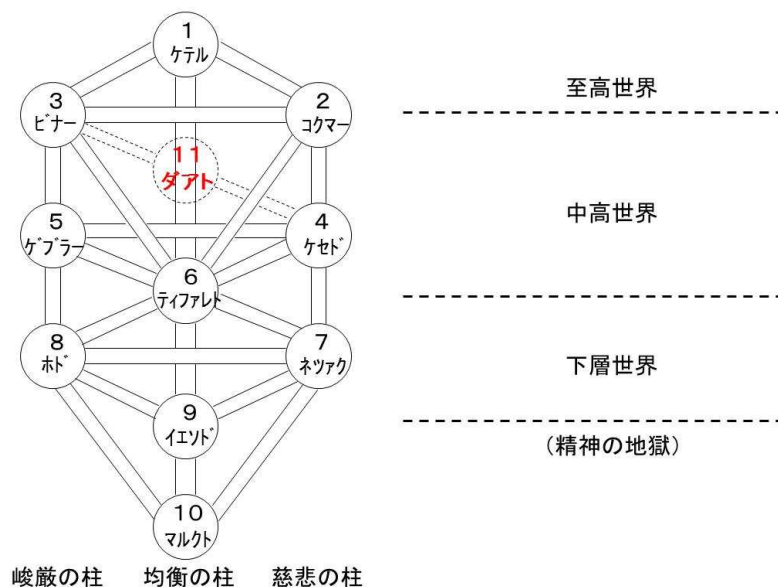
天御中主神＝起源意識（一つ巴）から物質（プラスとマイナス、陰陽）が分化して（二つ巴）、生命体が誕生した。生命体の進化と共に、起源意識も進化し（三つ巴）、生命体が真理（＝宇宙と生命存在の意義）を悟って起源意識と一体化した状態になれば、起源意識自身が更なる高みへと進化する段階となる。（花菱＝一つ巴が螺旋上昇した状態。）



<http://kamondb.com/kika/tomoe.html>

しかし、三つ巴の状態は、上昇する螺旋でもあるが、下降する螺旋にも成り

え、それは退化であり、「生命の樹」を下降して精神の地獄＝ケリポットに堕ち、その生命体もしくは宇宙が存在しえなくなることを意味する。



エゴが発達すれば、下降が上昇を上回る。エゴとは、穢れである。その穢れを祓う神々こそ、前述の神道の大祓祝詞に記載されている祓戸四神であり、四柱の神々で、花菱＝神の戦車メルカバーを形成する。すなわち、祓の神々を意識することに依ってエゴを取り去り、あるべき姿に戻るということである。その祓の先導役が瀬織津姫である。

花菱は一つ巴の螺旋上昇した状態だが、平面的には一つ巴と同義である。つまり、瀬織津姫は、人類があるべき姿に戻り、宇宙＝起源意識が更なる高みへと進化するための神であり、起源意識自身＝天御中主神とも言える。

(5) 鶴

さて、白山本宮の鶴来だが、わざわざ“鶴が来る”と当てている。鶴、そして剣が関わる宮が他にもある。それは、内宮・別宮の伊雑宮である。

神宮創建の翌年、鳥の鳴く声が昼夜止まなかった。倭姫が使いを遣わすと、嶋の国の伊雑の上方の葦原で、実った稲の 1 本を白い眞名鶴がくわえながら鳴いていた。それを聞いた倭姫は、その稲を抜穂にして天照大神の御前に奉ったのが、伊雑宮の創祀とされる。

また、飛鳥昭雄氏などに依れば、いずれ伊雑宮にアロンの杖＝草薙神剣が心御柱として戻されるという。

伊雑宮は天照大神を祀り、日本三大御田植祭と言われるほど重要な御田植祭が行われるが、漁師（＝海人）が奉仕する豊穰の祭りである。神宮を意味する“太一”と書かれたゴンバウチワを田に倒してバラバラにする。これは、豊穰の女神をバラバラにして土に還し、豊穰を願うという世界共通の儀式であり、その豊穰の女神とはイナンナである。土に還すから、国常立神でもある。

そして、伊雑宮の元宮は弥生海人の大王家の血統、籠神社（眞名井神社）であり、最高神はイナンナ＝豊受大神で、豊穰の神である。また、太一＝北極星＝天御中主神である。これにて、籠神社の極秘伝“天照大神（＝太一）＝天御中主神＝豊受大神”となる。ただし、眞名井神社はシリウスの和名の1つに因み、与謝宮とも言うから、起源意識と言うよりも、シリウスの方が濃厚である。そして、眞名井は“眞名鶴”に通じる。



<http://www.canno.jp/blog/-201406241>

また、伊雑宮向かいの神武参剣道場には、伊雑宮の御神紋とされる六芒星が刻まれ、眞名井神社の石碑にもかつては六芒星が刻まれていた。白山本宮の御神紋も、六角形の亀甲紋系である。

神武参剣道場



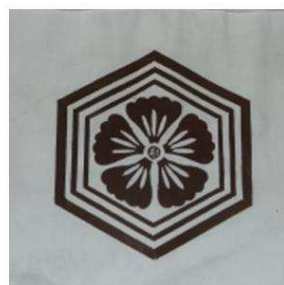
<http://japantemple.com/2015/07/16/post-185/>

眞名井神社



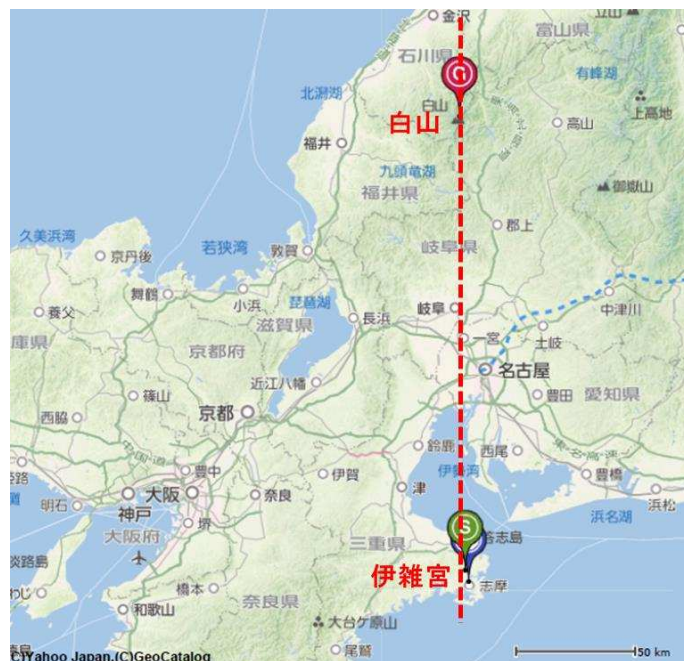
<http://wave.ap.teacup.com/renaissancejapan/263.html>

白山本宮



Wikipedia

そして、伊雑宮（北緯 34 度 22 分 49 秒、東経 136 度 48 分 32 秒）と白山（北緯 36 度 09 分 18 秒、東経 136 度 46 分 17 秒）を結ぶラインは南北に一直線となる。（白山中居神社も、北緯 35 度 59 分 32 秒、東経 136 度 46 分 7 秒だから、このライン上にある。）



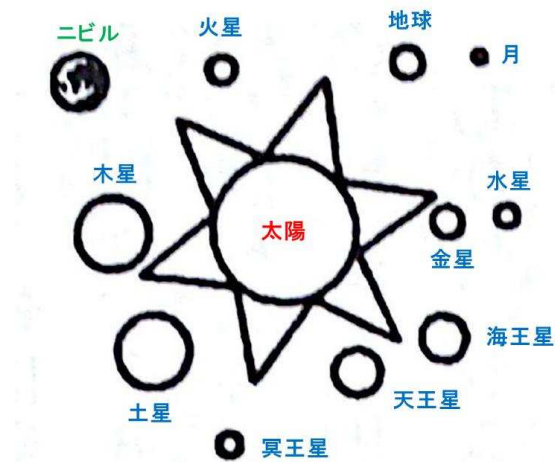
つまり、伊雑宮の眞名鶴が真北に飛んで行けば白山で（真北は北極星＝太一＝天御中主神＝起源意識の暗示であり、北極は宇宙全体を貫いて起源意識と繋がる S 極磁気単極子である）、白山比咩神社の鶴来は“眞名鶴が来る”ということであり、**六芒星＝籠（目）の中の鳥（＝鶴）**ということである。

そして、伊雑宮の眞名鶴がイナンナ＝菊理姫の象徴ならば、白山の瀬織津姫が菊理姫によって隠されたということになる。それは、菊理姫＝シリウスに隠された瀬織津姫＝天御中主神＝起源意識＝創造のエネルギーであり、**シリウスは太陽に隠され、起源意識はシリウスに隠され、という構造**である。

六芒星は太陽神ウツのシンボルであり、六芒星が刻まれた元は籠神社の眞名井神社で、眞名井神社の亦名はシリウスの和名の与謝（宮）だから、シリウスは六芒星の太陽に隠されていると同時に重ねられている。

また、眞名井神社では豊受大神を祀るが、豊受大神は天御中主神＝宇宙根源の神ともされており、起源意識は与謝＝シリウスに隠されていると同時に重ねられている。

シュメールの粘土板に記された太陽系



「人類を創成した宇宙人」(ゼカリヤ・シツチン、徳間書店)

ここまでを簡潔にまとめると、次のようになる。

- ・瀬織津姫：エンキ、イナンナ、ドゥムジ、ニンフルサグ。
エネルギーとしてはシリウス、起源意識。
- ・菊理姫：イナンナ、エンキ、ドゥムジ。エネルギーとしてはシリウス。

ドゥムジは亡くなって冥界に行き、イナンナはドゥムジの亡骸を取りに冥界に下った。ドゥムジの父エンキは、イナンナの冥界からの帰還を助け、エジプトではプタハとされ、冥界の神ともされる。故に、瀬織津姫も菊理姫も実態がよく解らない、隠された世界の神となる。そして、イザナギ、イザナミの物語も冥界下りに関わるから、白山比咩神社や白山中居神社では、両神も祀られる。

また、眞名鶴、眞名井の“眞名”故に、瀬織津姫と菊理姫は“名の真相”に他ならない。

*名の真相

眞名井の“眞”の字は、人が首を下向きにしている状態を象ったもので、“顛(てん：逆さま)”の原字である。つまり、この世の物質世界は、主体である宇宙創造のエネルギー＝起源意識が客体となった状態であり、起源意識の中に浮かんて、主体を認識できないような井戸のような状態である。

宇宙の歴史からすると、起源意識自身が、自らが何なのかを知るために、生命体とその活動の場(器)となる宇宙を創成した。それにより、エネルギーの塊の状態ではできなかった、“感覚”というものを通して感じ、様々なことを認識・経験し、進化できるようになった。

その生命体が物質を認識したり、自らと他を区別するためには、名が必要となった。（自己の誕生。）それは単に、識別のためだけのものだった。しかし、人類型の生命体が誕生してから、「あなたとわたし」という単なる識別に、「あなたの物と私の物」という所有の概念が付随し、それがいつしか膨らんで、「あいつのアレが欲しい」という欲望が発生した。これがエゴである。エゴがエゴを呼び、その所有欲から憎しみが生まれて戦争が発生し、遂には、自らが起源意識の分身（己、巳）であることを忘れてしまった。これはとりわけ、太陽系最外の惑星ニビルの住人アヌンナキが人類に対して“神”として振る舞い、人類が神を自らの外に求めることによって促進された。それにより、人類はエゴを発達させてしまったのである。

換言すれば、エゴという鎧をまとうことに依り、本来の性質（本質）が解らなくなってしまったのである。だから今に至るまで、人類型の生命体の歴史は、その繰り返しである。その原因は、“名”に所有欲＝エゴが付随したことに尽きる。このような宇宙の状態を表したのが“眞名井”である。

アヌンナキは猿人を遺伝子操作して人類を創り上げ、自らを人類に対する“神”として振る舞うことにより、いつの間にか人類に大きなくびきを負わせたが、むしろ、エゴを解消するという全宇宙的な宿命により、地球と人類を学びの場とさせられた、とでも言うべきか？だから、地球＝知球＝知宮と命名されている。他の言語では、決してこの真理は解らない。

すなわち、名の真相とは、宇宙の真理そのものである。

(6) シリウス系と太陽系の関係

起源意識（瀬織津姫＝天御中主神）はシリウス（菊理姫）に隠され、シリウスは太陽（天照大神）に隠され、という構造が見えた。では、スミルノフ物理学から起源意識とシリウス系、太陽系の関係を考察してみよう。

① 誕生の起源

スミルノフ物理学では、物質宇宙を生み出した起源意識は無限的な広がりを持つ巨大な光のエネルギーで、そこから黄金比フラクタル分割により巨大な恒星が誕生し、そこから更に恒星や惑星、物質、生命体が誕生した。そして、それらは対数螺旋構造を成す S 極系エーテル繊維（龍のエネルギー）で繋がっている。これから考えられるシリウス系と太陽系の関係は、以下である。

a：シリウス系と太陽系の元となる恒星からシリウス系恒星が黄金比フラクタル分割して誕生し、そこから更に黄金比フラクタル分割して太陽が誕生した。

b：シリウス系と太陽系の元となる恒星から、シリウス系恒星と太陽が同時に黄

金比フラクタル分割して誕生した。

何をもって妥当と判断するのかは難しいが、以下の事実に着目する。(＜神々の真相 1＞)

- ・ ニビルはシリウス系の惑星だったが、宇宙的な変動により太陽系の軌道に侵入し、度重なる地球への接近により、ニビルと共通の生命の種が地球にばら撒かれた。
- ・ 上記理由により、ニビルの住人アヌンナキは、人類と直接交わることが可能だった。
- ・ しかし、当初の実験では、ニビルの水晶容器ではうまくいかず、地球の土から作った容器（＝シリカ）で実験したら成功した。

恒星から別の恒星が黄金比フラクタル分割によって誕生すると、新しい恒星系は元の恒星系に対して分割数が1多くなるので(惑星の誕生では変化しない)、aの場合、太陽系はシリウス系よりも分割数が1多いことになる。＜スミルノフ物理学＞には詳細が記されていないが、スミルノフ物理学に於いては、宇宙はその中心に向けて黄金比フラクタル分割をして、その分割数は太陽系の存在する空間に於いては137回である。

粒子・素粒子についての転がり速度運動量保存則

$$m \left\{ \left(\frac{c}{137} \right) - v \right\} = M \frac{c}{137}$$

M: 静止質量、m: 速度vの時の運動質量、c: 光速度

この回数は、実際に観測される原子の微細構造定数の逆数137に現れており、絶対静止エーテルに対する太陽系の直線運動速度が光速度の1/137であることも意味する。また、原子も黄金比フラクタル分割で生成することから、太陽系近辺に於ける元素の最高原子番号は理論的に137となる。

よって、原子の微細構造定数がニビルと地球で同じなのか、異なるのかによって、この問題は解決できる。

ニビルと共通の生命の種が地球にばら撒かれ、アヌンナキが人類と直接交わることが可能だったのは、両者の肉体を構成する元素種及び原子の構造（原子の微細構造定数）が同じだからに他ならない。すなわち、原子の微細構造定数

はニビルと地球で同じであると言える。

しかし、当初の実験では、ニビルの水晶容器ではうまくいかず、地球の土から作った容器（＝シリカ）で実験したら成功したことは、これに反するのではないか？

・人類誕生の場面（＜神々の真相 1＞）

ニビルの水晶の容器にニンマーは生命エッセンスの混合物を用意し、2本足の（猿人）雌の卵子をそっと置いた。そして、アヌナキの種子を含んだ“メ”で受精させ、2本足の雌の子宮に挿入した。今度は妊娠し、開腹して取り出すと、新生児が生きていた。しかし、上半身は毛むくじゃらで、下半身はアヌナキに似ていた。成長を待つと、手は道具を扱うことには向かず、話すことはできなかった。そこで、何回か試行錯誤した。“メ”の中のエッセンスを注意深く検討し、1つの“メ”から少し、もう1つの“メ”から少し取り出し、メスの卵子に受精させた。耳が聞こえなかったり、視覚が弱かったり、足が麻痺したり、精液が漏れていたり、手が震えていたり、肝臓が機能していなかったりした。エンキは失望し、「原始的労働者はできない！」と嘆いた。しかし、ニンマーは「成功するまで続けよ、と私の心が駆り立てるの」と言って、実験を続けた。

エンキが言った。「ひょっとすると、何かが不足しているのかもしれない。地球自身を形成しているもの、その成分が欠けているのではないか？ **ニビルの水晶ではなく、地球の粘土でそれを作ろう**」エンキは、アブズ（アフリカ）の粘土を使うよう、指示した。ニンマーは、浄化する槽を粘土で作し、その中で混合物を作った。そして、2本足の雌の卵子をそっと置き、アヌナキの血液から採取した生命エッセンスを、徐々に正確に容器に加えた後、2本足の雌の子宮に挿入した。受胎し、出産の時を待ちわびた。いよいよ新生児を取り出すと、それは男の子で、姿は完璧だった。しかし、成長しても言葉を話せなかった。

そこで、エンキは考えを巡らせた。「唯一、変えなかったことがある。それは、地球の雌に卵子を挿入したことだ。これが、最後の障害の可能性もある。もしかすると、アヌナキの子宮が必要なかもしれない！」“生命の家”に沈黙が走った。彼らはお互い見つめあった。互いの胸の内を探りながら。ついに、ニンマーが震える声で言った。「か、賢いお言葉だわ、お兄様。それで、アヌナキの誰が、自分の子宮を提供するのかしら？ひょっとすると、怪物をお腹に宿すことになるのかもしれないのに」エンキが言った。「私の配偶者、ニンキに聞いてみよう。彼女に事情を詳しく話そう」すると、ニンマーが言った。「駄目よ、混合物は私が創ったの。見返りも危険に身をさらすことも、私の責任であるべきよ！私が子宮を提供するわ！」エンキは頭を垂れ、彼女を抱きしめ言った。「ならば、そうすれば良い」そして、その通りにした。

妊娠は地球のより長く、ニビルのより短かった。そして陣痛が始まり、男の子が誕生した！エンキは彼を抱きかかえ、下半身をびしゃりと叩くと、正常な音を口から発した。エンキは新生児をニンマーに手渡し、彼女は両手で掲げた。「私の手が創り出したのよ！」と勝ち誇ったように叫んだ。彼らは新生児の手足、容貌、各器官の機能を調べ、いずれも問題なかった。頭髪は漆黒で、毛むくじゃらではなく、肌は滑らかでアヌンナキの肌のようなようだった。その色は、どす黒い血のようで、アブズの粘土のような暗褐色であった。彼の男性器を見ると、アヌンナキのものとは異なり、前部が皮膚で覆われていた。エンキが言った。「この包皮で、地球人と我々を区別しよう」ニンギシュジッダが言った。「我々は完璧さに到達した！」エンキはニンマーに、名前を付けるよう促した。彼女は新生児の肌を指で撫で、「アダムゥと呼ぶわ。“地球の粘土のような者”、それが彼の名前よ」。

原子の微細構造定数がニビルと地球で異なるために、このようになってしまったとも言えるが、ここで注目すべきは光学活性である。水晶＝シリカは光学活性があり、左手系と右手系があるが、生命体のタンパク質を構成するアミノ酸にも左手系と右手系がある。＜スミルノフ物理学＞に記されているように、地球上の生命体のタンパク質はほぼ全て左手系（L体）のアミノ酸から構成されているのは、左手系シリカが鋳型となったためである。（左手系メビウス帯の立体8の字に沿って大きな電流が流れ、メビウス帯と同位相であるシリカ正四面体の中心に強力なS極磁気単極子が生じ、生命の進化となる。）

ならば、人類創成実験の際に使用されたニビルの水晶が、右手系もしくは右手系と左手系の混合物（ラセミ体）であってもこのような現象は発生するので、ニビルと地球で原子の微細構造定数が異なるという裏付けにはならない。

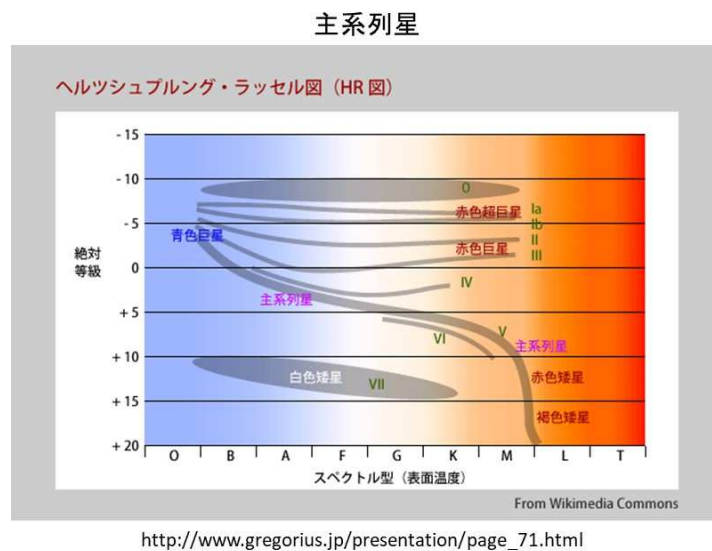
よって、前述のとおり、原子の微細構造定数はニビルと地球で同じであり、シリウス系と太陽系の元となる恒星から、シリウス系恒星と太陽が同時に黄金比フラクタル分割して誕生したと言える。

②起源意識とシリウス系、太陽系のエネルギー的關係

シリウス系恒星と太陽が同時に黄金比フラクタル分割して誕生したことは判った。しかし、これだけでは何故、起源意識（瀬織津姫＝天御中主神）はシリウス（菊理姫）に隠され、シリウスは太陽（天照大神）に隠され、という構造となるのか説明できない。ならば、この構造は、起源意識との結びつきの強さを暗示しているのではないか？つまり、起源意識とのエネルギー的繋がり、強さを暗示しているのではないか？これを検証してみよう。まず、エネルギーの

源となるシリウス系と太陽系の恒星を従来理論で比較する。(Wikipedia)

- 太陽は銀河系の中ではありふれた主系列星の 1 つ。推定年齢約 46 億年。
- シリウス系の主星シリウス A は、太陽の約 1.7 倍の大きさで、質量は約 2 倍の A 型主系列星。推定年齢は 2 億年から 3 億年。太陽を除くと、全天で最も明るく輝く恒星である。
- 伴星シリウス B は 50.1 年でシリウス A の周囲を公転しており、大きさは地球とほぼ同じで、質量は太陽とほぼ同じ白色矮星。約 1 億 2000 万年前に寿命が尽きた主系列星。



ここに、＜星の信仰＞に記されている内容も加味する。

- ドゴン族はシリウス B を「ディジタリア」又は「ポ・トロ（小さな星）」と呼び、この星が宇宙の中心で、宇宙に於けるあらゆる創造の出発点と見なしている。
- シリウス B の密度は、1 立方センチ当たり 1 トンである。
- ドゴン族の伝承では、シリウス星系には現在でも確認されていない第 3 の星「エンメ・ヤ（女のもろこしの星）」が存在し、シリウス B の 4 分の 1 の重さであり、地球にとっての太陽のようなもので、シリウス B よりも 4 倍明るく、大きな楕円軌道を描いてシリウス A の周りを回っている。
- エンメ・ヤとシリウス B との半径間の角度は常に 90 度で、シリウス B と同一周期で同じ方向に回っており、「ニャン・トロ（女の星）」という惑星を伴っている。このニャン・トロが、未開だった人類に様々な知識を授けて帰って行っ

た人類の祖で水の主ノンモ＝エンキの故郷であり、つまり、ニビルである。

従来理論では、恒星内が水素の核融合反応であることを前提とし、光のスペクトルによって、その星の年齢を推定している。対して、スミルノフ物理学では、恒星内部には自転軸の周りに負の誘電率・透磁率の円筒状空間が存在し、そこに S 極磁気単極子と N 極磁気単極子が常駐し、中心付近の温度は高温ではなく、恒星の北極から外部に出て来た負の質量の S 極単極磁力子と、南極から外部に出て来た正の質量の N 極磁気単極子が元となって温度の低い黒点や温度の高い輝点、プラズマ恒星風となる、としている。だから、従来理論で言われる恒星の推定年齢や主系列はまったく当てになるものではなく、ここでは無視する。シリウス系と太陽系で重要なことは以下である。

- ・シリウス A は太陽の約 1.7 倍の大きさで、質量は約 2 倍であり、太陽を除くと、全天で最も明るく輝く恒星である。
- ・シリウス B は、シリウス A を焦点にして 50 年周期で楕円軌道を描いている白色矮星で、ドゴン族は宇宙に於けるあらゆる創造の出発点と見なしている。
- ・シリウス星系の第 3 の星エンメ・ヤはシリウス B と同一周期で同じ方向にシリウス A の周囲を公転しており、惑星ニビルを伴っていた。ニビルにとって、エンメ・ヤは地球に対する太陽のようなものである。

ここでキーとなるのは、シリウス B は白色矮星で、ドゴン族は宇宙に於けるあらゆる創造の出発点と見なしている、ということである。では、白色矮星とは何なのだろうか？

従来理論 (Wikipedia) では、質量が太陽の 3 倍以内の恒星が水素の核融合反応によって中心核がヘリウム等になって温度が上がると赤色巨星となり、水素でできた外層部は惑星状星雲の形を取って宇宙空間に放出され、残った中心核が白色矮星になるとされる。(質量が太陽の約 8 倍よりも重い恒星の場合は中性子星、約 30 倍以上の場合はブラックホールになるとされる。) 要は、太陽よりも重い恒星の最終進化形態の 1 つということである。

しかしながら、スミルノフ物理学に於ける質量とは、対数螺旋構造を成して宇宙全体を貫いている S 極系エーテル繊維の相互作用であり、星や原子の中心はすべて S 極系エーテル繊維で繋がっている。そして、ダークマターとして S 極磁気単極子の雲が存在し、ダークマターの S 極系エーテル繊維ですべて繋がった左巻き S 極磁気単極子どうしが互いに接触面で自転速度を遅めあう結果、巨大な重力で引きあってまとまった極限状態がブラックホールである。(ブラックホールの傍には N 極磁気単極子の集まりであるホワイトホールが必ずあり、

ブラックホールと対になって、双極磁場トーラスを形成している。)

ならば、従来理論で白色矮星と分類される星は、ブラックホールほどではないが、S 極系エーテル繊維がかなり強力に集中した状態と言える。

さて、巨大なエネルギーを有する恒星の黄金比フラクタル分割に於いては、新たな恒星がいくつも同時に誕生するわけだが、分割後は次のケースが考えられる。

I：エネルギーがすべて新たな恒星に分配され、元の恒星としては何も残らない。

II：エネルギーが一部残り、凝縮して集中し、新たな星（元の残骸）となる。

星にエネルギーを供給しているのは核融合などではなく、無限のエネルギーを有する起源意識と繋がっている S 極系エーテル繊維である。この S 極系エーテル繊維が強力に集中した状態が白色矮星であり、中性子性であり、ブラックホールである。

従って、シリウス B が高密度の白色矮星で、宇宙に於けるあらゆる創造の出発点と見なされているのであれば、これこそが大元の恒星の残骸であろう。つまり、シリウス系恒星と太陽が同時に黄金比フラクタル分割する前の恒星（元シリウスと名付ける）が凝縮して集中したのが、シリウス B である。故に、起源意識とのエネルギー的な繋がりは最も強く、かつ、シリウス系及び太陽系の各星々とエネルギー的に繋がっている。

このシリウス B は、太陽よりも明るく大きいシリウス A の周囲を公転することになったので、太陽系との距離的なことを考慮しても、起源意識とのエネルギー的な繋がりはシリウス系の方が太陽系よりも強い。太陽系には恒星が太陽しか存在しないことも、エネルギー的にシリウス系よりも疎であることを意味している。

そして、シリウス系に於ける各恒星と起源意識とのエネルギー的な繋がりの強さはシリウス B を最大とし、あとは推定質量から鑑みて、次にシリウス A、次いでエンメ・ヤとなる。（シリウス A は太陽の 2 倍の重さ、エンメ・ヤは太陽とほぼ同じシリウス B の 1/4。）すなわち、起源意識とのエネルギー的な繋がりの強さは

地球<太陽<エンメ・ヤ<シリウス A<シリウス B<起源意識
となる。

ニャン・トロ＝ニビルはエンメ・ヤ系の惑星なので、エンメ・ヤが黄金比フ

ラクトル分割して誕生した惑星である。そして、地球は太陽が黄金比フラクタル分割して誕生した惑星で、太陽はエンメ・ヤを含むシリウス系恒星と共に誕生したから、宇宙的な黄金比フラクタル分割の回数としては、地球はニビルと同じ 137 回である。

しかし、ニビルは元々起源意識とのエネルギー的繋ぎの強いシリウス系に存在し、ニビルの方が地球よりも進化が速かったことからすれば、起源意識とのエネルギー的繋ぎは、地球よりもニビルの方が強いと言えるだろう。なお、恒星の方が起源意識から供給されるエネルギーは当然大きいので、ニビルよりも太陽の方が起源意識とのエネルギー的繋ぎは強い。

地球<ニビル<太陽<エンメ・ヤ<シリウス A<シリウス B<起源意識

③神々との関係

この項の冒頭では、起源意識（瀬織津姫＝天御中主神）はシリウス（菊理姫）に隠され、シリウスは太陽（天照大神）に隠され、という構造が見えた、と記した。しかし、ここでシリウスには瀬織津姫と菊理姫が重ねられていたことを思い出そう。アヌンナキのカバラである。

- ・瀬織津姫：エンキがメイン、イナンナ、ドゥムジ、ニンフルサグ。
エネルギーとしてはシリウス、起源意識。
- ・菊理姫：イナンナがメイン、エンキ、ドゥムジ。
エネルギーとしてはシリウス。

瀬織津姫に起源意識の要素があるのは、人類の母なるニンフルサグが重ねられているからだ、単にシリウスと言った場合、一般的には最も明るい恒星シリウス A を意味している。それがニンフルサグを重ねて起源意識と同一視された理由は何なのか？

この項ではエネルギー的関係を詳しく考察してきたが、それで判ったことは、現在のシリウス系と太陽系の元となった元シリウスの残骸がシリウス B であり、起源意識とのエネルギー的な繋ぎが最も強く、それ故、ドゴン族はシリウス B を宇宙に於けるあらゆる創造の出発点と見なしているということである。（そのようにエンキがドゴン族に教えた。）しかし、現在のシリウス B の光度は太陽の 1 万分の 1 程度しかない、肉眼で見ることはおろか、高精度の望遠鏡でも観測が困難である。つまり、シリウス系の本質は天空で最も明るいシリウス A ではなく、“見えないシリウス B” にあり、これこそが瀬織津姫としての本質である。見えないからこそ、記紀にはまったく登場しない。つまり、意図的に“隠

した”のではなく、“隠れている”のである。そして、現在のシリウス系と太陽系の大元の恒星の残骸だから、ある意味、我々の小宇宙（シリウスー太陽系）の創造神＝天御中主神＝起源意識でもある。これが、瀬織津姫を起源意識＝天御中主神とも見なせる理由である。起源意識もまた、我々の物質宇宙からは見えないので隠れており、つまりは、**天御中主神の性質とは、見えない根源神**ということである。

“隠れている”“見えない”ことは、現世に対する冥界でもある。エンキはエジプトではプタハとして冥界の神とされているので、瀬織津姫に当てはめるアヌナキとしてはエンキがメインとなり、冥界下りに関わったイナンナとドゥムジも重なる。何よりも、エンキはエンリルとの誓いにより、見えない神や天使として振舞った。また、天御中主神としては、人類の母なるニンフルサグだけではなく、めったに姿を見せない最高神アヌも該当してくる。

対して、**最も明るく輝くシリウス A には、冥界の男神エンキと陰陽の対を成す女神イナンナを原型とした菊理姫が当てられた**。太陽女神で豊穰の女神（豊受大神）であるイナンナがドゥムジの亡骸を取りに冥界に下ると地上は暗くなって作物も実らなくなり、冥界でイナンナは「生命の樹」に掛けられて瀕死の状態となったものの、エンキの与えた「生命の水」によりイナンナが“復活”して冥界から地上に戻ると、地上は光を取り戻し、作物は再び実るようになった。すなわち、イナンナは冥界に関わる太陽女神であり、冥界は昼の世界に対する夜の世界でもある。

天空に最も明るく輝くシリウス A は夜の太陽とも言え、天照大神が昼間の男神の太陽神ウツならば、それと陰陽の対を成す夜の太陽神はウツと双子の太陽女神＝イナンナとなる。実際に闇夜を照らすのは月であり夜の太陽であるシリウス A（月もシリウス A もエンキがシンボルとして共通する）だが、恒星としての太陽はシリウス A である。

故に、イナンナを原型とする菊理姫を当てたのである。菊理姫はその名の如く“菊の理”だから、シンボルとしては菊で、これはイナンナのシンボルであるロゼッタが原型である。そして、ウツのシンボルは六芒星だから、これにて十六花卉八重表菊紋と六芒星のペアとなり、前述の神武参剣道場や現在撤去されつつある神宮参道の石灯籠にペアで刻まれている印に他ならない。つまり、石灯籠の印は内宮の天照大神＝ウツ、外宮の豊受大神＝イナンナを暗示していただけではなく、太陽とシリウス A の関係も暗示していたのである。

また、太陽とシリウス A の関係は聖方位に象徴され、太陽が復活するとされる冬至の真夜中にシリウスが輝く方向（北半球では真北から西に 20 度傾いた方位ライン）に向けて都市や神殿などが建設された。また、エンキの領地エジプ

トでは、シリウスが日の出と同時に東の地平線から昇って来る時期が（夏至頃＝太陽活動の最盛期）ナイル川の氾濫時期と重なり、その周期は約 365 日で、太陽暦の基となった。地球とシリウス、太陽はそのような位置関係にあり、まさに太陽に隠れたシリウスである。（＜星の信仰＞）

そして、シリウス B＝瀬織津姫がシリウス A＝菊理姫よりも以前に存在していたことは、菊理姫とされる以前の神名は瀬織津姫だった、という白山中居神社関係者の談にも暗示されている。

このように、起源意識とのエネルギー的繋がり強い元シリウスから現在のシリウス系や太陽系の星々、アヌンナキや人類のような高等生命体が誕生したので、元シリウスは大いなる創造の神であり、自身は黄金比フラクタル分割で凝縮したから大いなる破壊の神でもある。これがシヴァ神、すなわち、エンキとイナンナの重なるの象徴たる神の、大いなる創造と破壊の神の本質である。そして、シリウス系と太陽系誕生後にはシリウス B として暗くなったがために＝隠れてしまったがために、創造と破壊は最も明るく輝くシリウス A の性質とされた。また、シリウス A～C、ニャン・トロ＝ニビルを併せて、大祓祝詞の祓四柱の神々となる、と言えるが、ニビルは惑星なので、むしろ四柱の神々は神宮の花菱と同じく、神の戦車メルカバーと見なした方が妥当だろう。

ここに、籠神社の極秘伝も併せてまとめる。

- ・起源意識：天御中主神、豊受大神、天照大神。
- ・シリウス B：瀬織津姫。天照大神の荒御魂。
- ・シリウス A：菊理姫。シリウス系としてまとめて豊受大神。
- ・太陽：天照大神。
- ・地球：国常立神（地球の主エンキ）、豊受大神。

ここで、いくつもの重なりがある天照大神と豊受大神に着目する。単純には、天照大神は太陽神的なので太陽が、豊受大神は豊穰の女神なので地球が該当する。しかし、籠神社の極秘伝では“豊受大神 又名 天御中主神 又名 天照大神”であり、これまでの考察から、豊受大神はシリウス系にも該当する。これでは、相関が混乱しているようにも見える。そこで、天照大神と豊受大神の真意について、改めて見てみよう。

④天照大神と豊受大神、天御中主神

- ・天照大神

太陽を象徴していることは明白。同じように、シリウス系の現在の主太陽は

シリウス A だから、シリウス A もまた天照大神である。ただし、シリウス A の場合、“(太陽系の) 太陽に隠された本当の太陽” などとも言われる。隠された面は陰陽で言えば陰であり、天照大神の陰の面は対を成す豊受大神である。

しかし、本当に隠れて見えないのはシリウス B や起源意識であり、隠れて見えないことは御魂で言えば和御魂に対して荒御魂だから、天照大神の荒御魂ということになり、それが瀬織津姫とされているのは矛盾しない。

つまり、**天照大神の本質は光であり、その光としての側面は、遍く照らす起源意識＝天御中主神の光の側面でもある**。起源意識はすべてが光だから、そこに存在するものには蔭（かげ）ができない。これを“お蔭様”と言ひ、神としては近江の三上神社などで祀られている**天御蔭神（アメノミカゲノカミ）**でもある。

・豊受大神

籠神社の秘伝では“豊受大神の和御魂は天照大神の荒御魂、天照大神の和御魂は豊受大神の荒御魂”とされているから、前述の天照大神の荒御魂＝瀬織津姫は豊受大神でもある。

豊受大神はシンボリックには女神イナンナである。それが豊穰（＝大地＝地球）の女神であり、太陽女神であり、シヴァ神（エンキとイナンナ）の投影されたシリウスである。また、大地のシンボルとして国常立神＝地球の主エンキと合わされば、鞍馬寺の奥の院で祀られる魔王サナト・クマーラであり、シリウス由来の光の棒＝貪・瞋・痴の三毒を破る不動明王の剣の炎（俱利伽羅剣、草薙神剣のエネルギー体）を手に行している。（＜星の信仰＞）

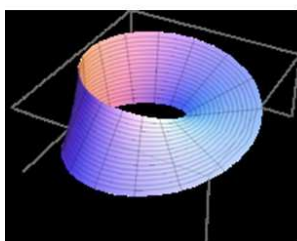
では、天照大神の本質が光であるならば、豊受大神の本質は何なのか？ 豊受は“トヨウケ”だが、元は“トヨケ”で“豊氣＝豊かな氣”である。籠神社に依れば、豊受大神は水気根源の神とされるから、“豊氣＝豊かな氣”の“氣”とは宇宙根源の氣である。そして、その性質は水や月とされ、これらは陰陽で言えば陰の性質だから、エネルギー的には負と見て良い。すなわち、負のエネルギー、負の S 極系エーテル繊維エネルギーであり、それは＜スミルノフ物理学＞に記されているように、起源意識から流れ出て全宇宙を貫く龍のエネルギーであり、水は S 極系エーテルエネルギーの良い媒介物である。

つまり、**豊受大神の本質は負の S 極系エーテル繊維エネルギーであり、起源意識＝天御中主神から流れ出て全宇宙を貫く龍のエネルギーの側面である**。（起源意識自体、負のエネルギー体である。）だから、エネルギー的に負のエネルギーの性質の強い部分は豊受大神となる。前述の不動明王の俱利伽羅剣は俱利伽羅竜王が燃え盛る炎となって巻きついている（Web：名刀幻想辞典）とされるのも、龍のエネルギーの暗示だからである。

すなわち、天照大神は起源意識＝天御中主神の光の側面、豊受大神はエネルギーの側面であり、これこそ、籠神社・第 82 代宮司がおっしゃる“二神一座、一神二座”の真意で、両者で起源意識＝天御中主神を成す、ということである。故に、天照大神の荒御魂＝陰の面は起源意識の負のエネルギー（龍のエネルギー）で豊受大神の和御魂、豊受大神の荒御魂＝陰の面は起源意識の光で天照大神の和御魂なのである。

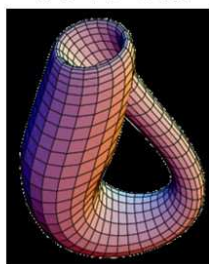
＜スミルノフ物理学＞に記されているように、“コ（の）じんじゃ”とは“宇宙根源の氣を取り入れて丸く収まる神の社”という意味であり、宇宙の真理を表す“眞名井”と実に良く呼応しているのは、このような真意があるからに他ならない。そして、我々の物質宇宙は起源意識の中に浮かび、主体である起源意識を直接認識できないが、その負のエネルギーが噴出してくる井戸のような状態のクラインの壺、メビウスの帯構造である。それは、水や酒（メビウスの帯構造と同位相＝縮図である四面体構造を有する故に負のエネルギーを媒介できる物質）を入れるヒョウタンとしても例えられ、眞名井神社の別名の 1 つが、ヒョウタンを意味する匏（ひさご）を冠した匏宮（よさのみや）であるのは、極めて暗示的である。更に、もう 1 つの別名「与謝宮」の“与謝”は、シリウスの和名の 1 つ“与謝星”に由来するが、ここまでの考察からすれば、それは起源意識に重なるシリウス B である。

メビウスの帯



Wikipedia

クラインの壺

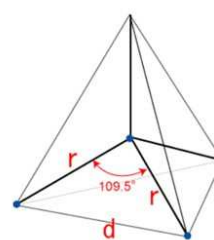


ヒョウタン



<http://blog.rustle.info/archives/274>

四面体



<http://chemieaula.web.fc2.com/lecture/cos.html>

まとめると、次のようになる。天御中主神、豊受大神、瀬織津姫は主に隠れた性質で、天照大神は表に出ている性質である。菊理姫も冥界下りの話に登場するので隠れた性質と言えるが、それは太陽系の太陽に対して“隠れた太陽シリウス A”ということである。

- ・起源意識：天御中主神。

光の側面が天照大神、負のエネルギーの側面が豊受大神。

- ・シリウス B：瀬織津姫。天照大神の荒御魂＝豊受大神。

元シリウスとしての天御中主神。

- ・シリウス A：菊理姫。隠れた太陽（陰）としての天照大神＝太陽女神。

天照大神の陰は豊受大神。

シリウス系としてまとめて豊受大神。

- ・太陽：天照大神。陰としての太陽女神は豊受大神。

- ・地球：国常立神。豊穰神、大地母神としての豊受大神。

いずれも新たな星を生むのは、女神の性質である。そして、いずれも豊受大神が関わってくるが、それは取りも直さず、起源意識＝天御中主神から流れ出て全宇宙を貫く負の S 極系エーテル繊維エネルギー＝龍のエネルギーであるからに他ならない。故に、豊受大神は根源神と言われるのである。そして、宇宙のメビウスの帯構造と同位相＝縮図である四面体構造の水は負の S 極系エーテル繊維エネルギーの良い媒体だが、これこそ豊受大神が水気根源とされる所以であり、この水気根源が瀬織津姫の水神としての性質であり、龍と水の相関でもある。



<https://buzzap.jp/news/20121231-hubble-telescope-2012/>



<https://search.yahoo.co.jp/image/search?rkf=2&ei=UTF-8&p=%E9%9B%B2%E9%BE%8D%E5%9B%B3>